

教育長だより

No. 6

2021年4月28日

学年集会の活用を！

～ 子どもにプラスだけでなく、教師にもプラス ～

『ほほえみ通信』（2015年12月）で出した内容の改訂版です。学年集会の効用を4点にまとめています。ほんの10分でもできます。連休の前後に実施していただければと思います。

1. 担任間の「差」を統一

学年集会は、学級ごとの担任の話「学年で統一する」という効果を持っています。特に生徒指導面での学級担任間のちょっとした「差」をなくすという点では、大きな効果があります。子どもたちの落ち着きがなくなって来ると、「弱い担任」（力量の弱い先生）に子どもたちは答えられないような投げかけをしたりして突いてきますから。また、担任間の「力の入れようの差」（これはこれでいいのですが。）を埋めて、学年挙げて『やるぞ！』という雰囲気づくりにも有効です。運動会や校外学習など、学年全体の取組みにも有効です。

もちろんご承知と思いますが、「生指」というとよく管理的な話になりがちです。そうではなくて、**子どもたちの「心を揺さぶるような中身のある話」で迫っていく**ことです。大きな効果と、話し手への絶大な信頼を得られる場となります。

2. 若手教員の育成

学年集会でベテランの先生が話すのではなく、若手の先生が自分の言葉で話すことによって、「力をつける」ことにもなります。**学年の子どもたち全員を「いかに惹(ひ)きつけて話せるか」**は、やっぱり場数を踏まないと難しいですよね。そういう「場」として、学年集会は大いに有効です。そして、若手にとっては、先輩と自分の語りとはどう違うのかを考えながら聞いていくことが大切です。ちょうど、先輩の授業を見るのと同じです。小規模校では、上・下学年などにする手もあります。

3. リーダーの育成（子ども集団の育成）

もう一つ、学年集会で子どもが話す場面をつくること。これは、学年全員という「大舞台で話す場」です。もちろん、話す子自身はかなり緊張します。しかし、そういう「場」をくぐりぬけた達成感が子どもを成長させ、学年のリーダーになります。こういう言葉があります。「**子どもは、緊張と葛藤のなかで成長する。**」この意味は、子どもの「体」は日々成長していきますが、「心」は、節目、節目に成長するもの。例えば、運動会や学習発表会などです。そうした場面で、子どもなりに緊張し、悩み、考えていきます。そういう「場」が、子どもの心を成長させるということです。

4. 集団行動の練習

学年集会などで整列を繰り返すことは、校外学習や修学旅行など、学年で集まる訓練にもなります。集合時間が大幅に短縮でき、その分、中身の話を提示できます。私が八幡中学校のとき、毎月曜日は
(裏面へ)

「学年朝の会」をしていました。わずか15分間ですが、子どもたちを成長させることができました。こんな風に「毎週○曜日の朝は学年朝の会」のように定型化すると、さらに効果的です。

※ 教師の立ち位置

最後に、話をしていない先生方の立ち位置です。子どもの前にいる人、列の横にいる人、子どもたちが並んでいる後ろにいる人。それぞれですが、大切なのは「子どもの顔が見えるところ」にいること。だれかが前で話しているとき、子どもがどんな表情で聞いているのか、顔を見れば一目瞭然。これは、授業と同じです。（先生は子どもの顔を見ながら毎日の授業をされています。どこまで理解できているかがわかるからですよね。）

特に、いつも後ろにおられる方、あなたはこの学年集会などの「お客さん」となってしまいます。ちょうどテレビを見ている立場と同じです。これではいけません。せめて自分のクラスの子の顔が見える位置に行きましょう。また、フリーの先生は、学年で「気になる子」が見える位置へ。こうして、学年の先生みんな子どもたちに臨むのです。自分の位置に関心を持ち、「**学年で子どもを育てる**」のです。これは中学校ではあたりまえですが、小学校では気をつけたいことです。（注意：生徒指導で子どもたちに「指導」する場合は、必ず全員が前に出て、一列に並びましょう。先生方の熱い決意が、こうするだけで子どもに伝わります。）